

タイトル：2018 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.12)

日時：2018年11月30日（金）15:00～17:35、12月1日（土）10:30～13:05

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

“Financial Administration in Syria under the Rule of Muhammad Ali”

藻谷 悠介（東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程）

本報告会では、エジプト総督ムハンマド・アリー統治下のシリアにおける、財務機構の分析を行なった。エジプトにおける近代化改革で世界史上も有名なムハンマド・アリーは、エジプト＝トルコ戦争での勝利を経てオスマン朝に自身のシリア統治を認めさせ、シリアにも同様の「改革」をもたらしたと評価されてきた。一方で、この時期に焦点を当てた研究の蓄積は少なく、この「改革」の実態は未だ十分に解明されているとは言い難い。本報告会ではこの点を踏まえ、統治の基礎となる財務に注目し、そこに見いだされる「改革」について検討した。

具体的な流れとしては、まず当該時期のシリアにおける財務に関わった主要な役人・機関を概観し、財務における彼らの役割分担を整理した。その上で、この時期の財務構造の新たな特徴として、以下の2点を指摘した。1点目は、財務構造の規模が大幅に拡大したことであり、財庫や地方協議会といった機関がシリアの各都市に新設されて財務に携わっただけでなく、多くのシリア現地住民が書記や協議員として新たに地方財務に巻き込まれるようになったことを明らかにした。2点目として、強固かつ特徴的なヒエラルキーの出現を指摘した。シリア全域における会計や財務状況は、全てバフリー・ベイというシリア出身の役人の監視下に常時おかれ、彼を通じて逐一エジプトに報告された。一方で、彼にシリア全域の財務の決定権が全面的に委ねられていたわけではなく、現地出身の役人の誰にも最終的な決定権は与えられず、相互に監視を行なうヒエラルキーが生み出されていた。報告の最後には、エジプト支配以前との変化の大きさから、この新たな財務構造の創出が「改革」と呼ぶに値するものであると結び、「改革」の目的についても若干の示唆を残して今後の展望へと繋げた。

コメンテーターの Samir Seikaly 先生（AUB）からは、主に2点の重要な指摘を頂いた。1点目は、財務においてこのような変化があったとして、それを安易に「改革」と結びつけて良いのか、というものであった。さらに先生からは「改革」と呼ぶためには、その根底を成す理念を明らかにする必要があることもご指摘いただいた。自分の報告の構成を反省すると共に、とりわけ「改革」の理念について今後も大いに考察を進める必要があることを痛感させられた。2点目はより具体的な指摘であり、役人を統御する上では、彼らへの権限の部分的な譲渡が不可欠であり、権限の制限のみに着目するのでは不十分、というものであった。1点目の指摘と共通して、「改革」を語ろうとするあまりに視野が狭くなっていたことに気づかされた。今後、財務以外にも研究対象を広げる上でも非常に有益な指摘であり、大変有意義な報告となった。

国内外で研究に励む同世代の他分野研究者の報告も、自分にとって大いに刺激になったことは言うまでもない。また、エクスカージョンなどで自身のフィールドの一部であるレバノンの地理や現況を実際に観察できたことは、今後の研究においても必ず有用なものとなるだろう。本報告会を主催してくださった AA 研の先生方、関係者の皆様に心よりお礼申し上げます。